



KANSAI
UNIVERSITY



CTL Kansai University Center for Teaching and Learning Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2017

vol. 24



胸の理性・頭の理性



教育開発支援センター長 田中 俊也

人間は、機械と異なり、物理的・社会的環境世界と接しているうちに「知識」を獲得し、やがてその「知識」そのものが知的環境世界として厳然とあとからの人間の前に立ち現れることになる。始めに世界があり、やがて世界ができ、ついには学ぶ対象としての世界となる。

1人の人間の知的発達過程を眺めてみよう。赤ちゃんとしてこの世に生まれた段階では、まさに物理的（ベビーベッドの周りのもの）・社会的（母親を中心とした人に関するもの）環境に接し、そこから得られる情報（多くは感覚・運動的情報）が知識の源となる。その知識は快・不快に代表されるような感情や情動中心の知識である。こうした物理的・社会的環境は成人しても老年になってもいつまでも継続する。したがって、そこから形成される知識は、どの年齢層においても本人にとってはきわめて根拠のある、生きしさを抱えた知識である。海外留学で現地にとっぷりかかる経験がこれにあたる（レベル0の世界）。やがて人間は、モノ・ヒト全体との直接的な

関わりから徐々に離脱し、さまざまな代用経験から知識を獲得していくことができるようになる。現実そのものではないがきわめてそれに近い物理的・社会的環境がつくれられた時にはそこでも知識・スキルの獲得ができる。イマージョン、シミュレーションの環境の中での経験がこれにあたる（レベル1の世界）。ここではまだ、モノ・ヒトの世界との直接経験から得られる、モノ・ヒトに対する感情的なレベルの知識である。これらを胸の理性（レゾン・根拠）としよう。

一方で人間は固有の「表象」活動を行うものである。モノ・ヒトそのものではなく、それへのイメージや概念といった、モノ・ヒトから一歩離れた世界を持つこともできる。それらに、自分なりの勝手なラベルを貼って思考をする世界に入る。自分なりの勝手なラベルなので、他の人のコミュニケーションは難しいが、自分が生きている世界のことがらに対し、旺盛な好奇心を持ち爆発的に知識を増やそうと自主的に努力し、事実増えていく（レベル2の世界）。

この、つけたラベルが公共につかえるようになったのがシンボルとしての言語・数値・記号である。逆に言語や数値・記号の使い方の文法（シンタックス）を学べば、他者と共有できる、効率的な知識が獲得できる。いわゆるシンボル操作が自由にできる世界である（レベル3の世界）。ただし、「リンゴ3個とみかん4個あわせていくら?」という問いに平気で「7円！」と答えたり、「みつからない」と「なかった」のは同じという論理を振りかざしたりするという危うさを持つ世界でもある。

この、レベル3の世界（頭の理性の世界）は、その獲得を目指すのが教育の目的の1つでもあるが、記号操作の力に長けた人間の形成だけが大学教育での大きな目的だと考えられない。非効率だが、レベル2の世界にひたる環境を確保しつつレベル3の世界に誘っていくことのほうがより重要なことではないか、と、ラーニングコモンズでの学生の熱心な活動を微笑みながら観察している。

フォーラム・セミナー報告

FD Caféを開催しました

4月22日(土)、FD Café（新任教員研修）を開催しました。新任教員8名、授業支援グループより事務職員4名、教育推進部より5名、都合17名が参加して、和気藹々とした雰囲気で交流を図りました。着任してから二週間ほどしか経過していませんが、この短期間で不安を覚えたり、疑問を感じたりすること、あるいは既にトラブルシューティングによって解決したこと、どのような工夫を施せばさらによい活用ができるかというアイデアなどを共有しました。そのうち、授業に関しては、多人数を対象とした講義や卒業研究の在り方を模索する声が多数寄せられ、教育推進部岩崎准教授がヒントとなるアイデアを複数提示しました。LMSの使用方法についての関心

も高く、こちらについては授業支援グループ竹中氏のインストラクションにしたい、モバイルPCを使いながら活用の模擬体験をしました。このほか、ループリックについての概要説明と学習支援のための諸施設の紹介がなされました。参加者にはアクティブラーニング読本「グループワークの達人」「これからはラーニング・アシスタント」と「ループリックの活用ガイド」が手渡され、時間に制約あるために説明や体験が十分にできなかったことについての情報を補うようにしました。こちらについては必要に応じてSummer

日時：2017年4月22日(土)13:00～16:30
場所：第2学舎2号館C301教室

Caféを開催して、今回、参加できなかった教員にも入店の機会を提供することも考えています。

(教育推進部 三浦真琴)



FD Caféのイントロダクションの様子

本年度第1回目のFDフォーラムを開催しました

第17回目のFDフォーラムが2017年4月26日に開催されました。今回は、香港大学の教育学部・David Carless教授に、「大学での優れた授業法を提案する」というタイトルでご講演をいただきました。場所は千里山キャンパス第2学舎のC402教室。本学の教職員はじめ、他大学からも熱心な方々のご参加をいただきました。

香港大学はいまでも世界ランキングでも上位を占める有名大学で、“Times”の高等教育機関のランキングではアジアで5本指に入っています。Carless教授は、学習者志向の評価(LOA)で世界的にも知られた研究者で、

CTLと同様の機関であるCETL(Center for the Enhancement of Teaching and Learning)でも仕事をされています。

ご講演では、質の高い指導を確保するにはどうするか、という観点から、学生への高い期待を表明し、学生の学習活動とその評価が連携していること、学習の仕方そのものを徐々に質の高いものにさせていくこと、など、7点にわたって紹介がありました。また、ICT活用や反転授業についての言及もあり、通訳の労をおとりいただいた文学

日時：2017年4月26日(水)16:30～18:00
場所：第2学舎2号館C402教室

部・安藤輝次教授の解説もあいまって、大変有意義な時間を過ごすことができました。

(教育開発支援センター長 田中俊也)



講師のCarless教授

教育開発支援センターからのお知らせ

SD研修プログラムが開始されました！

文部科学省は2017年からSD(スタッフデベロップメント)を義務化しました。スタッフとは、職員だけを指すのではなく、執行部にかかる教員も含まれ、教職員がともに大学をよりよくするための活動に取り組む必要が出てきました。関西大学はこれまでSDとして単発のプログラムを提供してまいりましたが、2017年度からは体系的なプログラムを提供するべく全5回の大学教育に関するプログラムを立ち上げました（右記参照）。

本プログラムの特徴は、職員・教員に加えて、学生も参加していることです。大学の主役は学生たちです。学生からの意見を聞くことができるこのSDプログラムはほかの大

学ではなく関西大学ならではの取り組みだといえます。第1回目のプログラムに参加した教員からは「学生はそんな風に考えているのですか、勉強になります」、職員からは「もっとほかの職員にもうけさせたい」といった感

想をいただいております。来年度も継続的に実施していく予定になっていますので、関心のある方はぜひご参加ください！ご希望の回のみの参加も大歓迎です。

(教育推進部 岩崎千晶)

【学生・教員・職員三者協働型研修プログラム シラバス】

- 第1回 カリキュラムと大学教育—内部質保証システムの構築とは—（5月19日 担当：森朋子）
- 第2回 教育から学習へ（6月2日 担当：三浦真琴）
- 第3回 教育評価と大学教育（6月16日 担当：千葉美保子）
- 第4回 ICTと大学教育（6月30日 担当：山本敏幸）
- 第5回 学習環境と大学教育（7月14日 担当：岩崎千晶）

Learning Assistant

LA活動報告

台湾での国際学会でLAが活躍しました

2017年3月に台湾で行われた、最先端のITの様々な分野について研究を共有し、未来のITについて考える主旨の国際学会(International Symposium on Grids and Clouds 2017)に、LA 7名が学会スタッフとして参加しました。この学会には、世界30カ国から280名ほどの参加がありました。

これまで、現地の学会スタッフと協働で準備から運営までを担当していましたが、今年は本学からの学生スタッフが中心となって学会の準備から運営を担当しました。学会開始前から現地入りし、参加者に渡す学会資料の準備、会場内の案内ポスターや会場入口のセッション案内の準備、学会本部の設置、受付、会場の設営をおこないま

した。学会開催中は、受付、各セッションでのAV機器の調整、タイムキーパー、発表者ごとに発表資料のアーカイブ、コーヒーブレイクの準備等の業務をチームで担当していました。閉会式では、学会主催者から感謝状をいただきました。

(教育推進部 山本敏幸)

インターンシップ後のふりかえり

今回は昨年に引き続きの参加ということで、昨年に比べ、仕事の責任や量が増え、それに対するプレッシャーを感じましたがやり遂げることができました。それを特に強く感じた出来事は、今まで山本先生が行っていた連絡等のやり取りを学会の担当者と直接行ったことです。様々な事柄を英語を用いて話し合い、合意形成をしました。また、学会の期間中、想定外のトラブルがありましたが、それらに関しても問題解決を用いて対処することが出来ました。今まで学んだ交渉学における合意形成を実際の社会の場で用い、英語でコミュニケーションを取ったということは、貴重な経験になりました。このインターンシップで培った経験を、今後活かしていきたいと思います。

(総合情報学研究科博士課程前期課程1年 池澤智也)

ISGCの経験を通して学んだことは、相手の気持ちを先読みして行動し、情報をきちんとわかりやすく伝えることです。例えば、受付にいる時にはたくさんの人から質問を受けます。その中で多かった質問が、どこの教室でどこの講義が行われているかを知りたい人が多かったです。その際に、事前にどの会議室で何が行われているかを把握しておき、迷っている人がいたら伝えるようにしました。そうすることで、調べる手間が減り、会議室に遅れずに入室が出来ます。小さな自分なりの工夫をすることで相手に不便を掛けずに満足して頂けているように感じました。社会に出る前に、素晴らしい方々と出会えたことで社会人としてもっとしっかりし頑張りたいと思います。

(商学部4年 長谷美央莉)

今回、海外インターンシップと言う貴重な経験をさせていただきました。1番印象に残っている事は、時間に対する認識の違いです。日本では時間を守ることが常識と言われています。しかし、今回のインターンシップでそれが世界における常識では無いのだと感じさせられました。学会ではスムーズに運営を行るために時間配分がされています。しかし、決められた時間になんでも行動を起こさない参加者が多い印象を受けました。時間厳守の意思が強い日本では考えにくい出来事です。これらの出来事から自らの常識が全てでは無いのだと認識させられました。日本の枠組みで物事を捉えるのではなく他の視点からも捉える力を養っていきたいと思いました。

(商学部3年 大石祐也)

人生初海外インターンシップでアシスタントとしてISGCを参加することを通じて貴重な経験を積み、色々勉強になりました。一番学んだのは積極的に異文化への理解を深め、自分の視野を広げようということでした。例えば、受付を担当するとき、主な仕事は学会を参加しに来た方に登録してもらったり案内情報を提供したりすることでした。そのおかげで、世界各国から来た人たちと話し合ったり交流したりすることができ、海外への認識を深めました。物事の形は一つだけではないということが分かりました。今後、職場とかで物事に対し、多元的な見方や考え方を取り組もうと考えています。

(華中師範大学 日本語学科 杨绮玲
(本学留学生別科出身・2016年度春学期LA))

今回生まれて初めて、“海外”という場所の、世界中から研究者の方々がいらっしゃる“学会”という舞台を頂き当初は「これで大丈夫かな?」の連続でした。そんなあるとき、一人の研究者の方とお話をすると機会があり、自分の心中からお話しすることができた。そう思えたとき、「それでいいんだよ。馴れないし学会で緊張するのは僕も同じ。その笑顔で楽しんでね。」そう言って頂きま



学会初日の集合写真



学会のサポートをするLA



学会主催者より感謝状の授与

した。その時やっと必要なことが見えた気がしました。いろんな初めての中で、どんなに不安でも笑顔で。今回のこの経験を、助けて下さったみなさんの笑顔を忘れず、きっと素晴らしいこれからに繋げていきたいと思います。

(商学部2年 安井明日香)

今回、私は初めて自分の意思で海外へ行くことを決意し、ISGCに参加しました。初めの数日は今まで勉強したはずの英語がなかなか使えず、役に立つことができませんでした。しかし、共に参加した方々や主催者である方々の支えがあり、無事業務をこなすことができました。今回のこの研修を通して、自分の語学に関しての未熟さや人との付き合い方の難しさなど、普段の生活では学べないことをより深く学んだことで近い将来、留学へ行くことを考えるようになりました。この素晴らしい経験と少しの後悔をバネにこの場を用意してくださいました。全員が良かったと思ってもらえるような生活を送っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

(環境都市工学部1年 上山立起)

今回、僕は他のメンバーの皆さんより短い日数の参加で、出来ることが限られる次第となりましたが、大変有意義な経験をさせていただけたと感じております。多くの国から学生や教授、研究者の方々がお見えになる中で、その参加者全員にとって充実したプログラムにするためにはどのような役割を果たすべきか、また、そのプログラムを滞り無く進めていくためにはどのような工夫が必要かということをメンバー内で考えながら取り組めたことが、自分たちにとって意義のあるものでした。最後になりましたが、ISGCのスタッフとしてお手伝いさせていただける機会を設けてください、関係者の皆様に感謝の気持ちを伝えさせていただきたいです。本当にありがとうございました。

(商学部3年 松本幹匡)

Learning Caféを開催しています

第1回 Learning Café (担当:佐々木知彦 教育開発支援センター研究員)

今年度もLearning Caféが始まりました。Learning Caféは、主にアカデミックスキルの基礎を身につけるミニワークショップとして、コラボレーションコモンズにて開催されています。第1回は「文章を読むコツー速読と要約」と題して、文章の全体像を素早く把握する方法を取り上げました。こと読書に関しては一言一句ていねいに読まなければならないと思う学生も多いなか、それは読み方のひとつであり、目的に応じて精読や速読を自分で使い分けることが重

要だということを強調しました。6名の参加者は真剣にワークに取り組んでいましたが、「アットホームな雰囲気でとても役立つことを教えてもらえた」との声もありました。

春学期は7月まで開催します。プレゼンやグループワークのコツから交渉学まで、多様なテーマで開催しますので、ぜひ学生さんにお勧めください。

(教育開発支援センター 佐々木知彦)

日時: 2017年5月10日(水)14:50-15:50

場所: 凍風館コラボレーションコモンズ 参加者: 6名



Learning Caféの様子(5月10日)

第2回 Learning Café (担当:千葉美保子 教育推進部特別任命助教)

第2回 Learning Caféでは、「『ノートの取り方』悩んできませんか?~明日の講義から使える!大学のノートの取り方~」と題し、高校の授業と大学の講義の違いについて確認した上で、具体例を提示しながらノートの書き方についてのミニレクチャーと模擬講義による体験ワークを実施しました。

新入生を中心に、「ノートを見返すと重要な箇所が分からない」「先生の話すスピードが早すぎて、ついていけない」「ミニッツペーパーに

何を書いたらいいか分からず」など、今まさに悩みを抱えた方が参加されました。

参加者からは、「単にメモするだけでなく、活用する前提でとることが大事だと分かった」「今まであった疑問が解決できました。」や、「これから、今回学んだことを活かして講義中実践してみようと思いました」など、前向きなコメントが寄せられました。

(教育推進部 千葉美保子)

日時: 2017年5月17日(水)14:50-15:50

場所: 凍風館コラボレーションコモンズ 参加者: 8名



Learning Caféの様子(5月17日)

ライティングラボが開室されました

ライティングラボ（以下ラボ）では、レポート・論文・レジュメなどアカデミック・ライティングに関する個別相談対応を行っています。学生が授業外で課題等に取り組む時に、ライティング・チューター（大学院生博士後期課程・PD）からアドバイスをもらうことができます。相談対応は千里山キャンパス総合図書館ラーニング・コモンズ、ライティング・エリアで実施しています（2017年5月末時点）。レポート作成などで悩んでいる学生がいましたら、ぜひラボをご紹介ください。詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

また、ラボでは授業外でレポートの書き方が学べるミニセミナー「レポートの書き方ワントピント講座」を開催しています。今後の開催日時やテーマはウェブサイトやポスターに

お知らせいたします。なお、内容をカスタマイズした出前授業も承っています。ご担当されている授業内で、レポートの書き方などに関するレクチャーをご希望の先生はラボまでご相談ください。

その他、ラボの利用案内パンフレットとレポートの書き方に関する自習用教材冊子「レポートの書き方ガイド」を、第2学舎1号館教育開発支援センターおよび上記ライティング・エリアで配布しています。学生への配布などでまとまった数をご希望の際はラボまでご連絡ください。

(ライティングラボ アカデミック・アドバイザー／教育開発支援センター研究員 多田泰祐)



ライティング・エリア



個別相談対応の様子

問い合わせ先 (出前授業の依頼・資料や冊子の請求)
関西大学ライティングラボ（教育開発支援センター内）
URL: <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/index.html>
Mail: wlabo@ml.kandai.jp 担当: 多田（内線3801）

From
CTL事務局

「大学は教育機関ですか?研究機関ですか?」人事部門の研修担当者が私たち事務職員内定者に、ちょっと意地悪な質問を投げかけました。時は1980年代後半、当時といえば、近い将来訪れる18歳人口の激減という問題に、各大学が危機感を高めていた頃。本学の将来を担うべき私たちの自覚を促そうとするこの問い合わせに対し、まだ学生の立場にあった私の返答は「学生のために教育の充実を優先すべき(教育機関)」がありました。

…あの教育への熱い思いに反して、入職以来、教務部門の仕事とご縁のなかった私が、4月からCTLの一員として仕事に携わることになりました。20数年間、教育現場から離れていた私にとって、SAやTAが教職員と協働して授業や学生を支援する姿も、教職員と学生が共に学ぶ光景も全てが新鮮に映ります。これら含め、当時自分の中で「教育の充実」という抽象的な言葉でしか表せなかった「何か」が形となり、教育から学習へとシフトした具体的なプログラムが展開されていることに驚きと感動の毎日です。

CTL着任と教育プロジェクトへの参画は、改めて私は大学教育のあり方を考える機会を与えてくれました。時代は変わり、大学を取り巻く環境は大きく変化しましたが、今も「学び」への興味は、受験生が大学選択において最も重視する要件であり、在学生が関西大学での「学び」に大きな期待を寄せていることに変わりはありません。CTLで推進する取組みが全学に浸透し、より多くの授業でその考え方や手法が活用されることを目標に、そして、「なにより学生のため」という入職前の純粋な気持ちを忘れず業務に取り組む所存です。
(一)



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514
<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日 / 2017年6月30日 編集・発行 / 関西大学 教育開発支援センター